

<前回>宗教批判の系譜2——マルクス

1. マルクスの宗教批判

①人間社会に宗教が生じたのは単なる偶然ではない。宗教は欲求の疎外形態における実現(否定的な媒体)であり、人間の現実生活の一契機なのである。

- ・唯物史観：生産力と生産関係の矛盾の弁証法的展開
- ・上部構造と下部構造 ・個人と共同体

②宗教批判と政治社会批判とは密接に関連

「ドイツにとって宗教の批判は本質的にもう終わっている。そして、宗教の批判は、あらゆる批判の前提である。天上の批判は、こうして地上の批判にかわり、宗教の批判は法の批判に、神学の批判は政治の批判にかわる」(『ヘーゲル法哲学批判序説』)

- ・フォイエルバッハの議論の歴史的事実化

③宗教は人間社会の歴史において必然的に生じたものであるが、その歴史的条件が変化するとき、必然的に終焉を迎えるはずである。

- ・積極的批判と自動的消滅待望。
- ・宗教はアヘンである。

④宗教を不可欠の契機として含まないような現実世界の構築

共産主義社会：非疎外形態における欲求・類的本質の実現→これ自体がユートピアか？
自己止揚・自己否定の契機をマルクス主義は内部に組み込んでいるか？

2. ジジエク：ラカン派マルクス主義。

「キリスト教の転覆力を秘めた核は唯物論アプローチによっても理解できる、ということではない。わたしのテーゼは、それよりもはるかに過激である。つまり、この核は、唯物論的アプローチによってしか理解できない——そして後者は前者によってしか理解できない——ということである。真の弁証法的唯物論者になるためには、キリスト教的な経験を経るべきなのだ。」(13)

キリスト教思想とマルクス主義の新しい関係構築の可能性、宗教社会主義論の再開。

3. リクールのイデオロギー論：イデオロギーの三つの次元

- ・現実の転倒としてのイデオロギー (マルクス)
- ・正統化としてのイデオロギー (ウェーバー)、正統化の主張と信仰
- ・象徴的統合化、自己同一性としてのイデオロギー (ギアーツ)

12. キルケゴールと実存主義

(1) キルケゴールの思想的特徴

①宗教批判者としてのキルケゴール(1813-1855)

真のキリスト教と、近代市民社会において墮落したキリスト教

→ バルト (啓示と宗教との区別)

②反ヘーゲル主義 → 実存主義の先駆者

真理：客観性としての真理／主体性としての真理

体系：論理学の体系は可能である(諸イデアの相互関係)／しかし、歴史的な現実存在(=実存)に関わる事柄についての体系は、人間には不可能である

同時代性と同時性：信仰はキリストと信仰者とが同時性に立つことによって可能になる。主体的真理として、無限の情熱の対象として、決断的に関わること。

③仮名と実名の二種類の著作 → 思想の表現形式、レトリックに注目

仮名の意味：1. 小説あるいはフィクション性→著作自体に注意を集中(詩的機能)

2. 一人の思想家の思想が、複数の仮名へと分散する。思想の断片性
「私自身は、ヨハンネス・クリマクスよりは高いところにいるが、アンティ・クリマクスよりは低い地点にいる」、『死に至る病』副題：教化と覚醒を目的とする（＝建徳的）
ヨハンネス・クリマクス『哲学的断片』『非学問的後書き』
アンチ・クリマクス『死に至る病』『キリスト教の修練』

（2）キルケゴールの宗教批判——現代批判と市民社会のキリスト教

2. 「コルサール事件」（1846年）、週刊新聞『コルサール』（ゴシップ暴露）

3. キルケゴールの現代批判（『文学評論』の第2章）

- ・革命の時代と分別の時代（反省の時代、情熱のない時代）
水平化と外面性 → 新聞などのマスコミと世論・公衆といったもの
- ・宗教的信仰：個々人の救いの問題、個人ひとりひとりの事柄
宗教者にとってきびしい試練、修養 → 「良き戦い」として人生（天路歷程）
- ・沈黙、無関心を装った教会 → 非人間的大衆化社会を批判し真のキリスト教を守るべき使命をもつ教会（戦闘の教会、ecclesia militans）
という任務の放棄

（3）単独者の思想

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、——かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任を一人で担いながら、神の前にただひとり立つことである」 → 単独者 → ルターの信仰

①人間論の伝統：人間を統合と捉える議論、デカルトにおける、心（思惟）と身体（延長）という二つの実体の合成としての人間。両極性における人間存在の分析。

②人間の自己：自己関係という構造を組み入れた関係的存在

自己反省、自己参照性、自己関係：「……「自己」に関する関係」に関する関係……」 → 無限に多重化する存在者である（生成過程における自己）

③自己＝生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者 → 本来的な自己になるという課題

④関係存在としての自己の存在根拠

1. 人間は自己自身の中にその存在根拠を有する → 自己組織化
始まりの問題（宇宙の始まりのその前）と無限遡及のパラドックス
2. 関係存在の措定者を自己ではない他者として考える立場

⑤人間＝自己関係的存在→自己になる課題→不安と絶望の可能性

（4）実存弁証法と真のキリスト者への道

4. 「美的段階 → 倫理的段階 → 宗教性A → 宗教性B」：精神の発展プロセス

[美的段階]：美的なものが人生の原理あるいは目的になっている生き方

[倫理的段階]：倫理的なものが原理または目的とする生き方

・段階論か、類型・要素論か。理念的に再構成された関係論と段階論という仕方での説明。

「三類型」は「弁証法的発展段階でもある」（武藤、9）

「万人がキリスト者であるという途方もない錯覚が支配するいわゆる「キリスト教界」（Christenheit）において、「いかにして人はキリスト者となるか」を思索の焦点とする宗教的著者は、まず美的著者として出発せざるを得ないのである」、「もとよりこれは、或る意味で、欺瞞であって、そこに匿名の意味も存するわけであるが、この欺瞞は、真理

へ導こうとするためのものにほかならない。」(9)

5. 「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」(マタイ 26:41)。

[宗教性A]: 「わたしは特定の宗教は信じないが、神や霊の存在は信じる」

6. 宗教性AとBとの関係(宗教性一般の立場からキリスト教へ)

7. [宗教性B]: 同時性、あるいは絶対的逆説性

8. 市民社会において墮落したキリスト教(精神性から脱落)と異教(無精神性)

(5) キルケゴールの自己論

9. 『死に至る病』(岩波文庫、1849): 絶望の現象学から絶望として罪論へ

序

緒言

第一編 死に至る病とは絶望のことである

一 絶望が死に至る病であるということ。

A, 絶望は精神におけるすなわち自己における病であり、そこでそこに三様の場合が考えられうる。——絶望して、自分をもっていることを意識していない場合(非本来的な絶望)。絶望して、自分自身であろうと欲しない場合。絶望して、自己自身であろうと欲する場合。

B, 絶望の可能性と現実性

C, 絶望は「死に至る病」である。

二 この病(絶望)の普遍性

三 この病(絶望)の諸形態

A, 絶望が意識されているかいないかという点を問題とせずに考察された場合の絶望。したがってここでは総合の諸契機のみが問題になる。

a, 有限性と無限性との規定のもとに見られたる絶望

b, 可能性と必然性との規定のもとに見られたる絶望。

B, 意識という規定のものに見られたる絶望。

第二編 絶望は罪である。

A, 絶望は罪である。

第一章 自己意識の諸段階(「神の前に」という規定における)。

附論 罪の定義が躓きの可能性を含んでいること。躓きに関する一般的考察。

第二章 罪のソクラテス的定義

第三章 罪は消極的ではなしに積極的であること。

Aの附論 けれどもそれでは罪は或る意味では非常に稀なことにならないであろうか?(倫理)

B, 罪の継続

a, 自己の罪にかんする絶望する罪

b, 罪の宥しについて絶望する罪(躓き)。

c, キリスト教を積極的に廃棄し、それを虚偽なりと説く罪。

10. 反省や参照という概念は、人間存在の基本構造に関して使用され、精神や自己といった人間理解の基礎概念として位置づけられる。

「人間とは精神である。精神とは何であるか? 精神とは自己である。自己とは何であるか? 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものになることが含まれている、——それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。人間は有限性と無限性と

の、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然性との、総合である。総合とは二つのものの関係である。しかしこう考えただけでは、人間はいまだなんらの自己でもない。」

(20 頁)、「関係がそれ自身に対して関係するということになれば、この関係こそ積極的な第三者なのであり、そしてこれが自己なのである。」(21)

「絶望とは自己自身に關係する關係としての自己(総合)における分裂關係である」、「総合のうちに分裂の可能性が存するのである。」(24)

「絶望とは分裂關係から結果し来るのではなく、自己自身に關係する關係から結果し来るものだからである。そして人間は自分の自己から脱け出ることができないように、自己自身への關係から脱け出ることもしない。」(27)

「自己のうちなること病」(29)

「自己自身に關係しているような關係である。これが自由である。ところで自由は可能性と必然性との規定における弁証法的なるものである。」(45)

「自己は無限性と有限性との意識的総合であり、自己自身に關係するところの総合である。自己の課題は自分自身となるにある」、「自分自身になるというのは具体的になることの謂いである。」(46)

「生成の途上」(47)

11. 「精神」「自己」としての「人間」:「關係が自己自身に關係する關係」という仕方での自己關係、つまり自己参照性によって特徴付けられている。自己關係は、反省や参照(あるいは言及性)一般がそうであるように、自己自身に關係することによって、最初の自己關係を変化させ、そこに生成のプロセスを生起させる。これは変化における自己同一性あるいは自己同一性の変化、さらには自己言及のパラドックスなど、人間存在に特有の問題を派生させる。

可能性としての絶望 → 不安

(6) キルケゴールの問題性

12. キルケゴールとマルクス、ニーチェ

・キルケゴールとマルクスとを關係づける必要性。

・ニヒリズムの問題への取り組み。「この世の相対的事物に対する深いニヒリズム」(武藤、6)、「イロニーを、無限の絶対的否定性として規定した」(57)

13. 個人と社会・共同体との關係。

個人の主体性の強調→単なる抽象論、大衆の蔑視→エリート主義あるいは単なる変わり者。「現実に対する保守的態度」(武藤、39)、「実存主義とラディカルな社会倫理の結合こそ、現代の課題であることを信ずるものである」(40)、「実存の現実化ないしは実存哲学と歴史哲学との結合という現代哲学の課題」(42)

(7) 近代と制度的自己再帰性——ギデンズ

14. 近代と不安、近代的な不安の現象形態

15. ギデンズの近代社会論における「再帰性」(reflexivity) 概念——「A についての言及が、A 自体に影響を与えること」——。

16. 人間存在の基本構造

→ 近代特有の現実性としての「制度的再帰性」(the institutional reflexivity)

人間存在の基本構造の近代特有の特殊的現実化・形態化。

つまり、再帰性が社会制度として存在すること、ここに近代的システム特有の問題が認められる。

17. 制度的再帰性の具体的形態としての近代的知。

近代的知の特性は、「モダニティでは根本的懐疑の原理が制度化されており、そこではすべての知識は仮説のかたちを取らざるをえない」(Giddens, 1991, 3)という点に現れている。

18. 再帰的知識の典型としての近代科学的な知：再帰的な知識とは、一度確立されれば不動の地位を獲得する知識、あるいは一切の懐疑をあらかじめ超越しているすべての知識の根拠といったものではなく、絶えず自己に参照的に関わることによって、繰り返し検証されることを自らの内に組みこんだ知識、つまり、「仮説—経験的検証(実験)」プロセスにおいて構造化された知識である。そして、こうした再帰的な知が、科学者集団という担い手によって制度化されているところに近代的知が成立しているのである。

19. キリスト教神学の場合。

「自己言及的な精神的活動」である「反省」あるいは「自己反省」は知一般を構成しているものであるが、これは神学にも妥当している(Dalferth, 1988, 49)。

「キリストにおける神の救済的な啓示は、常にキリスト教神学にとって中心的であり続けてきたが、近代神学においてはじめて、17世紀に提起された認識論的問題の圧力のもとで、啓示論が重要なものとなった」(ibid., 39)。つまり、近代における神学的知においては、知の内容をめぐる議論(神学体系の本論)に対して、知識の獲得の仕方や知の真理性の判定に関わる方法論的手続きについての議論(神学のプロレゴメナ)がしだいにより大きな比重を占めるようになる。

20. パネンベルクが指摘している宗教戦争後の教派的多元性の状況。

神学的知における再帰的メカニズムの作用というべき事態。制度化(大学と出版)。

↓

パネンベルクやヒック：神学的知の仮説性

21. ルーマン、ドゥルーズなどの現代思→想におけるシステム論

22. 近代の制度的再帰性の帰結：

懐疑という再帰的営みを制度化することにより(懐疑の制度)

→ 既存の「確実な知」を解体。

伝統的な宗教的な権威(聖書や伝統、そして啓示)も例外ではない。

→ 近代聖書学の成立は、この懐疑の制度化を象徴する出来事。

近代のキリスト教神学では、方法論や知の基盤をめぐる議論(体系のプロレゴメナ)に多くの努力が傾けられることになる。

23. 制度的再帰性としてのモダニティの自己修正・自己拡張的な動態。

再帰的に自らのシステムに関わることによってその欠陥や不十分さを修正しつつ、無限に自らを拡張してゆく(システムの自己修正と内部準拠性によるシステムへの繰り返し込み——近代・モダニティは再帰的な未完のプロセスであり、モダニティから、それ以降は生じない。ポスト・モダンという逆説——)。

↓

社会システムの外部の問いは内部へと繰り返され、「外部」という仕方では存立し得ないことになる(自然主義・歴史主義)。

近代的な知の営みにおいては、「神」でさえも、たとえば、人間の類的本性の投影として、社会システム内部で処理される。

24. 一切の伝統や権威の解体、伝統的宗教のモダニティのもとにおける根本的な危機。

リクール：近代化・世俗化のもとで、信仰はイデオロギー(欺瞞・隠蔽、アヘン)

かユートピア(幻想・幻滅、幼児性)かの二者択一にさらされると指摘した事態。

25. モダニティは伝統的宗教を解体するとしても、人間存在の可能性としての宗教性まで

をも排除することはできない——モダニティも宗教・祈りも再帰性を共有している——。
＝ギデنزの言う「抑圧されたものの回帰」という問題。

再帰性によって成立するシステムも、そのシステムの根拠づけ・正当化の問いを免れることができない。内部に繰り込まれ抑圧されたかに見える外部の問いは、システムのコントロール不可能な変動（いわゆる限界状況、戦争や革命、そして死）において、繰り返し舞い戻ってくる。

↓

制度的再帰性を特性とするモダニティも、システムの外部の問いにさらされるとい
う危険（可能性）を除去することはできない。安心・予測（＝未来の植民地化）を目ざ
し進展してきた再帰的なコントロール自体が、さらに大きな不安定要因となるのであ
つて、コントロールできないリスクの存在はモダニティへの正当性への問いを繰り返
し続ける。

<参考文献>

0. 『キルケゴール著作集』白水社。
『キルケゴール著作全集（原典訳記念版・全15巻）』創言社。
1. キルケゴール『死に至る病』岩波文庫。
Soren Kierkegaard, *The Sickness Unto Death. A Christian Psychological Exposition for Upbuilding and Awakening*, Princeton University Press, 1980.
2. 武藤一雄『キルケゴール』創文社。
3. 小川圭治『キルケゴール』講談社。
4. ディーム『キルケゴールの実存弁証法』創言社。
5. 川村永子『キルケゴールの研究』近代文藝社。
6. マッキノン他『キルケゴール——新しい解釈の試み——』昭和堂。
7. 稲村秀一『キルケゴールの人間学』番紅花舎。
8. エヴァンス、フェッター他『宗教と倫理 キルケゴールにおける実存の言語性』
ナカニシヤ出版。
9. 日本キルケゴール研究センター刊行、松木真一編『キルケゴールとキリスト教神
学の展望——<人間が壊れる>時代の中で』創言社。
10. 須藤孝也『キルケゴールと「キリスト教界」』関西学院大学出版会。
11. 橋本淳『セーレン・キルケゴール 北ツェランの旅——「真理とは何か」』創元社。
12. キルケゴール協会：<http://kierkegaard.jp/>
13. 日本キルケゴール研究センター：<http://www.justmystage.com/home/kierkegaard/>
14. アンソニー・ギデنز『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自
己と社会』、ハーベスト社。（Anthony Giddens, *Modernity and Self-Identity. Self and
Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press, 1991）
15. Ingolf Dalferth, *Theology and Philosophy*, Wipf and Stock Publishers, 1988 (2001).
16. 芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。
「ティリッヒのユーロピア論」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）、
第3号 73-82頁。
「2 意味世界とユートピア」「3 現代の宗教的状況と終末思想」（『キリスト教
と現代——終末思想の歴史的展開』（小原克博共著）、世界思想社、14-35頁）。
17. ドゥルーズ『差異と反復』河出書房新社（Gilles Deleuze, *Difference et repetition*）
18. ウルリッヒ・ベック『世界リスク社会論——テロ、戦争、自然破壊』、平凡社。
（Ulrich Beck, *Das Schweigen der Wörter. Über Terror und Krieg*, Suhrkamp, 2002）。